

## シンポジウム「日米地位協定と秘密保全法制」

秘密保全法案対策本部副本部長 出口 かわり (64 期)

政府が、秋の臨時国会に特定秘密の保護に関する法律案を提出する予定であることが最近の報道で明らかとなった（LIBRA2013年2月号から秘密保全法案について隔月連載している）。

当対策本部では、この法案に反対する前提として、特定秘密の指定の対象分野の一つである外交・防衛分野について学習すべく、本年7月30日にシンポジウムを行った。導入に簡単なクイズを行った後、「本当は憲法より大切な『日米地位協定入門』」の執筆者の一人である共同通信編集委員・石山永一郎氏に「日米地位協定の実態」と題して基調講演をしていただき、後半は元外務省国際情報局長・元防衛大学教授の孫崎享氏も加わってパネルディスカッションを行った。

冒頭のクイズでは、横田基地のために首都圏上空が米軍の支配空域となっていることや、沖縄県県民総所得に占める基地関連収入は2009年度には5.2%にまで減少していることが紹介された。

マニラ支局長やワシントン特派員等を経た石山氏からは、フィリピンでの米軍撤退の取材や米國務省高官へのインタビュー等、米軍に関する豊富な取材に基づくお話を伺った。日本は戦後、サンフランシスコ講和条約、日米安保条約の締結を経て、安保条約の付属文書として日米行政協定（現在の日米地位協定）が締結されたが、実態は日米地位協定こそが米軍の治外法権等、日本における米軍の強大な権益を取り決めており、米国は日本政府やメディアの対応を見ながら運用を変えていることについて、具体的なエピソードを交えて紹介された。

パネルディスカッションでは、孫崎氏からも、地位協定

が最も生活に影響を与えており、米国が日本と交渉する際には「自分たちが望むだけの軍隊を、望む場所に望む期間置いておく」という精神が今日まで続き、むしろ最近のオスプレイ問題からすると運用の仕方がますますひどくなっていると思われること、今、秘密保全法制の議論が出てきたのは、2005年「日米同盟：未来のための変革と再編」により、事実上安保条約を超えて自衛隊と米軍とが一体運用され、米軍が自衛隊を自分たちの戦略に使うにあたって情報をシェアするためであろうことが指摘された。

孫崎氏と対談したNYタイムズ東京支局長は、米軍と米国とは違うのに、なぜ日本人は米軍の言うことばかり聞いて米国を見ないのか、と述べたそうだ。アーミテージ元國務副長官も石山氏の質問に対し「私の意見に反対する者は米国にもたくさんいる。私は米国の利益のためにやっており、日本の利益のために行動したことはない」と潔く答えたという。「米国が日本を守ってくれる」というのは幻想に過ぎない。集団的自衛権構想は米国を守るために日本が攻撃される事態を招くものだと具体的に説明する孫崎氏の話聞いて、虎（米国）の威を借るつもり狐（日本の対米追従派）たちは、果たして日本の国益を真剣に考えているのだろうか疑問に思った。

本シンポジウムを聞き、私たちは外交・防衛について、視野の狭い偏った情報で判断しているのではないかと改めて思った。これからの日本の外交・防衛のために、自衛隊法の防衛秘密に関する規定を削除して、新たに秘密保全法制に移行する必要があるのか。むしろ政府に都合の悪い情報が隠される危険のほうがはるかに大きいのではないだろうか。

## もがれた翼パート20「虹がかかるまで」

子どもの人権と少年法に関する特別委員会委員 田畑 智砂 (64期)

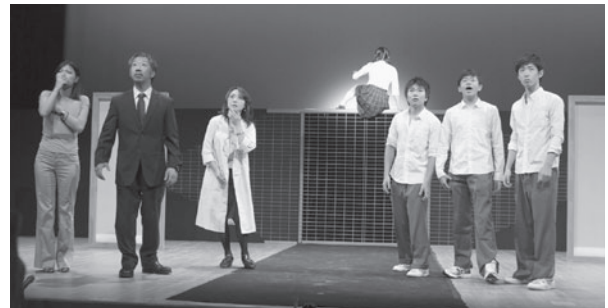
2013年8月31日(土)、北区赤羽会館講堂において、子どもたちと弁護士がつくるお芝居「もがれた翼 パート20～虹がかかるまで～本当は、いじめは嫌なんだ」が、約900名の市民のみなさんの入場の中、上演された。

「もがれた翼」は、1994年、子どもの権利条約批准を機に、子どもを取り巻く様々な問題を広く世間の皆様に知っていただくことを目的に始まり、今年で満20周年を迎えた。2004年には「もがれた翼」が劇中で取り上げたことをきっかけに、カリヨン子どもセンターが設立され、日本で初めての子どもシェルターが誕生した。

「もがれた翼」の出演者は、一般から広く募った子どもたちと、東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する特別委員会に所属する現役の弁護士たちである。

今年の「もがれた翼」のテーマはいじめである。中学3年生の萌は、仲良しだったはずの同級生、亜里沙から突然、鞆を隠され、ネット掲示板に悪口をかれ、学校に来るななどと言われてしまう。萌は、思い悩んで東京弁護士会「子どもの人権110番」に相談の電話をかける。たまたま当番で電話を受けた新人弁護士桐谷は、未熟ながらも直向きに学校交渉に挑んでいく。産後鬱の母親に代わり家事を一切行っていた亜里沙、萌を愛する余りモンスターペアレントと化する母、いじめを隠蔽しようとする教師たち、事件をセンセーショナルに報道しようとするマスコミ等、いじめ事件をきっかけに様々な人間模様が描き出されていく。

私はパート19から「もがれた翼」に出演し、今回二度目の出演をさせていただいたが、改めてこの劇が、いかに多くの時間と議論をかけて作成されていくかを実感した。「もがれた翼」は、何度も白熱した議論をチーム会議や全体



委員会で繰り返しながら、テーマ、タイトル、内容を決定していく。会場押さえからカウントすれば、準備に1年以上かけ、1つの作品に仕上がっているのである。

「もがれた翼」はもちろんフィクションであるが、子どもの権利擁護を通じて弁護士が経験した様々な事件がオマージュされている。サブテーマである「本当は、いじめは嫌なんだ」は、いじめに関わる子どもたちの声にならない心の声である。誰もがいじめをやめたい、やめさせたいと思いながら、行動を起こすことが出来ないでいるのだ。劇中で桐谷が萌に言う台詞「学校は命かけて行くところではないよ！」は私たち子どもの委員会の弁護士が、子どもたちに、心から伝えたいメッセージである。いじめを受けている子、いじめをしている子、いじめを見ている子、どうか周りの大人に、又は子どもの人権110番に電話して相談して欲しい。いじめで苦しむ子どもが一人でも減ってほしい、それが私たちの切なる願いである。

もがれた翼パート21は、2014年8月23日、北区北とびあで上演される。次回のテーマは未定であるが、来年も子どもたちをめぐる問題を市民のみなさんにわかりやすく伝える為、更にすばらしい作品を作り上げて行く所存である。

\*表紙裏にカラー写真掲載